

大学教育の立場から：大学ユニバーサル化時代の接続問題

荒井 克弘 (東北大学)

1. 大学入試問題から接続問題へ

接続問題は、学校システムに構造的な変化が生じたときにきまって登場する問題のひとつである。前回(1980年代)のはじめ、学習指導要領に大幅な改訂が加えられたときに、高校の教育課程の多様化が大学教育にどのような影響を及ぼすか、当時の社会的、教育的な関心を集めた。今回も、学習指導要領の改訂が接続問題を浮上させる引き金のひとつとなった。2006年問題の騒ぎも、2003年から新しく導入される教育課程の最初の卒業生がこの年次(2006年)に大学進学する、その危機感を表明したものである。しかし、今回の接続問題は従来より少し大きな要因を孕んでいるようにみえる。それは大学短大進学のユニバーサル化、大学収容力の過剰、受験競争の緩和、学力選抜の後退、という一連の事態のなかで接続問題が登場したということにほかならない。

大学・短大進学率(以下、大学進学率)はこの10年間に12~13%上昇して50%に近づき、1993年には第2次ベビーブームの煽りをうけて入学者は81万人を記録した。さらに現在では少子化による大学短大の収容力の過剰も現実のものとなっている。大学進学率が急激に上昇すればあとから必ず学力低下問題が生じる。今回もその例外ではない。それどころか、いままでに増して深刻なのは、高校教育の多様化と学力選抜の後退が同時進行しているためである。進学率があるレベルをこえ、層の厚い中間学力層が参入する段階では、学力選抜の識別性能は確実に低下する。「一点刻み」に選抜をしようにもできなくなるのである。理念的な改革論のレベルではなく、現場の問題として選抜が困難になり多様な側面からの評価が必要になる。

入試の多様化は臨時教育審議会の答申(1984)にもバックアップされて1980年代後

半に全国に普及した。しかし、いま振り返ってみれば、大半の大学は学力選抜の補完に向かわず、学力選抜の軽量化に突き進んだ。少子化に備えて志願者集めを仕掛ける好機と認識されたためであろう。人気取り的な入試が増え、入学後の教育とも対応のつかない多様化が増加した。

2. 細分化の進む高校の受験シフト

一部の難関大学をのぞけば、この数年受験競争の緩和が急速に進んでいる。2000年度入試では私大の3割で、短大では6割で定員割れが生じたと報告されている。その一方で、高校教育の受験シフトは広がりつづけている。多少、奇異な感じがしないではないが、受験競争の緩和と受験シフトの拡大は矛盾することはない。大学進学者が増え進学率が上昇しつづければ、受験シフトも広がりをもつ。進学の上位校であれ下位校であれ、高校教育の多様化が許容できる範囲で受験シフトは浸透する。勿論、専門高校も例外ではない。

筆者らのグループが行った調査によれば、かつて非進学校であった高校でコース・類型制の導入が著しい。高校入学段階から進学希望者を囲い込み、細分化した進学クラスで受験学習を徹底させる。進学率の高い高校よりも低い高校で教科科目の選択幅は少なく、教育課程の枠も固い。生徒個人が選択できる余地は平均して受験科目を中心に12単位前後であるから、下位の高校ではもっと限られたものとなろう。教育課程の多様化といっても、いったんコース・類型を選択してしまえば、それ以上の選択の余地はほとんどないのである。

学科試験への過度の依存を改めるという名目ではじめられた推薦入学も、いまや大学入学者の3割をこえ17万人に達する。さらに特別選抜には新手のAO入試も加わろうとしている。

規模的にみればもはや例外的な入学ルートとはいえない。はじめから推薦入学を目当てに進学準備をする受験生も少なくない。残念なことは、特別選抜の普及が、受験シフトの現状を見る限り、高校教育の改善に結びついていないとみえないことである。高校と大学、そして受験生個人にどのような影響を与えるか、特別選抜のあり方も十分な検討のすえに導入が図られなければいけない。受験の弊害をもたらすのは学科試験ばかりではないのである。

3. アドミッション・ポリシーと大学教育

「アドミッション・ポリシーを明確にすべし」とは昨年暮に答申された中央教育審議会の提案の一つである。大学・学部等が望む学生のイメージを明確にし、それに適合した入学者選抜を実施せよ、と要望している。もっともな提案である。ただ、望ましい学生像というのはそれほど多様であるのかという疑問がまず湧いてくる。学部や専門によって多少の違いはあるとしても、それほどたいした違いではないだろう。だとすれば、アドミッション・ポリシーをことさら強調する意味はどこにあるのか、真意を計りかねる。結局のところ、大学・学部の教育目標、教育課程と矛盾しない入学者選抜を実施するという以上の理由は見出し難いのではないか。

少子化が進み、学生集めが厳しくなった昨今の状況では、望む通りの入試をやれる大学は少ない。志願者集めを考えれば入試の振れ幅は明らかに限られている。工夫の余地があるとすれば、入試よりも学生たちが大学へ入ってきたあとの教育が問題であろう。現実に入ってくる学生の資質、学力を十分に見定めたうえで教育の中身、方法を詰めていかななくてはならない。

大学での補習教育に注目が集まってきたのは入試科目の削減傾向が顕著になった 1980 年代のおわり頃からである。1991 年に大綱化された大学設置基準は教養的教育のしばりを解消し、学部一貫教育の体制に向けて、大学への導入教育もいろいろなアプローチが可能になった。改善の努力は進んでいるといえるが、補習教育についていえば、改善よりも需要がそれを上回っているようにみえる。補習授業の導入は 95 年あたりでいったん減少したものの、再び増加に

転じ、98 年には全国で 100 大学をこえた（文部省調査）。補習授業の実施も改善努力の一環に違いないが、補習が高校科目の再履修に終始している限りは解決に向かっているとはいいがたい。筆者らが行った調査においても、大学で学習困難に陥る者は該当科目の未履修者だけではなかった。半分は高校でそれを履修しており、さらに受験科目に選んだ者も少なくなかった。高校教育と大学教育との接続の本質が問われる問題である。

4. 新しい接続、新しい学校システムの模索

接続問題として当面問われているのは、大学進学がユニバーサル化するなかで、どうやって進学者の学習意欲を高め、必要な準備学力を身につけた学生を育てることができるかであろう。しかし、学校システムの量的構造が大きく変わり、生涯学習化も進んでいるなかで、今日、要請されている問題はそれだけにとどまらない。教育内容、方法に関して、初等中等教育、そして高等教育までを貫く、教育システム全体の見直しが必要とされている。そして同時に、それぞれの教育段階に固有の特性、すなわち発達段階に見合った完結性がそこに求められてもいる。その意味で、「高校と大学との接続」はトータルな教育改革の入り口に位置する問題であり、同時に全体システムの見直しが進まなければ解決のつかない問題でもある。すでに高校教育のユニバーサル化は行き着く上限に達している。中学・高校の接続の意味は当然、高校と大学の場合とは違うにしても、はたして中学と高校の「接続」は成功しているのか、改めて検討の余地がある。ユニバーサル化の先例として、また大学進学までの貴重な段階のひとつとして義務教育から後期中等教育への「接続」は検討に値する。高校と大学の接続問題も、じつはこのあたりからスタートし、固め直していく必要がある。

(参考文献・資料)

- 荒井克弘編『大学のリメディアル教育』
広島大学大学教育研究センター, 1996
- 荒井克弘編『学生は高校で何を学んでくるか』
大学入試センター研究開発部, 2000